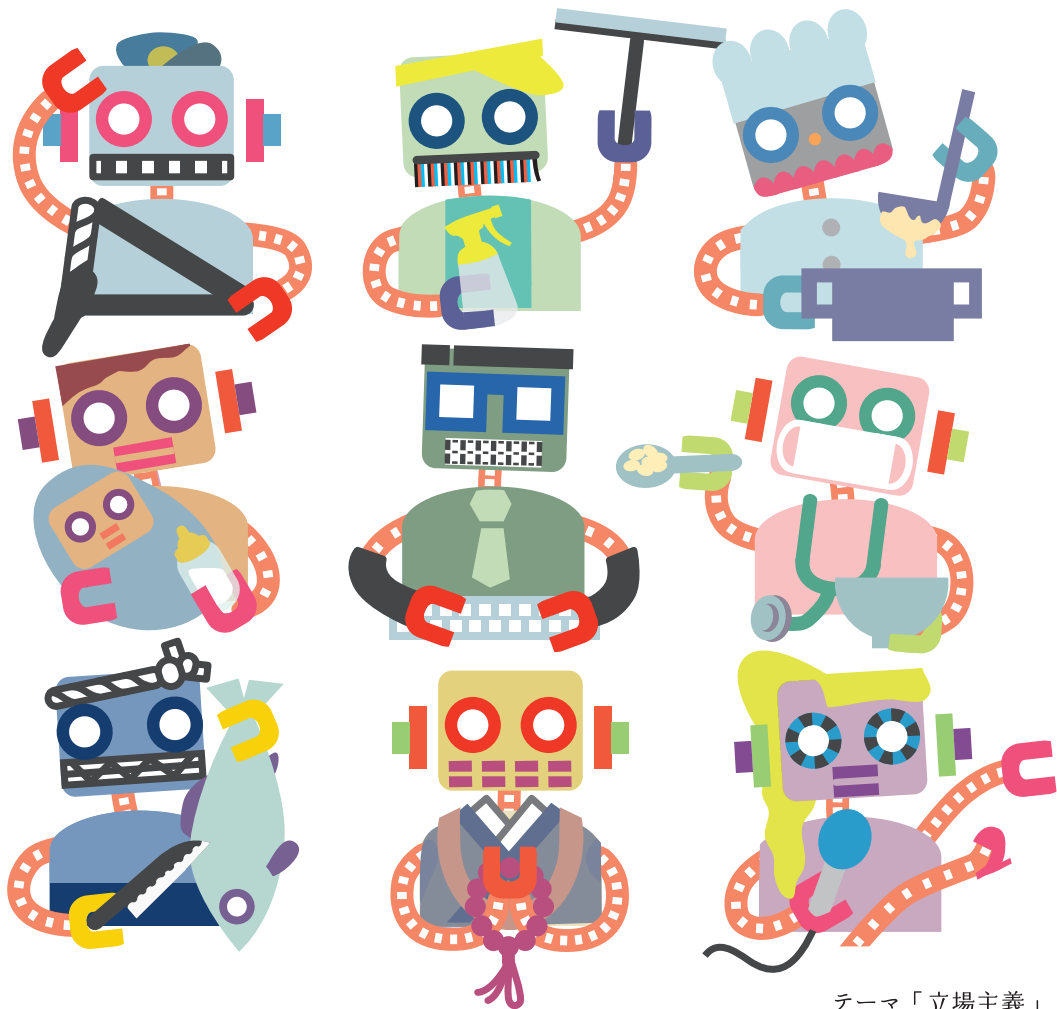


メンズ あいあう

2015

Vol. 9

女性室広報誌



テーマ「立場主義」

寄稿

差別を超え、創造性の海へ 安富 歩さん 2

| 報告 1 | 男女両性で形づくる教団をめざす協議会 6

| 報告 2 | 第15回 女性会議 7

| 報告 3 | 女性室公開講座 岡崎会場 10

| 報告 4 | 女性室公開講座 熊本会場 12

| エッセイ | 女のささやき『男性の仕事 女性の役割』千葉寿子 14

男のつぶやき『「家」と「覚悟」』内山真明 15

寄稿

差別を超え、創造性の海へ

安富 歩さん

(東京大学東洋文化研究所教授)

「役割」と「区分け」

人間社会は分業によってできています。ですから、必然的に役割が発生します。役割はそれぞれに習熟が必要であり、適性があったりしますから、すべての人がすべての役割をルーティーン（決まった仕事を一連の手順ですること）でこなす、という完全に平等なシステムは現実的ではありません。

そうになると、どういう役割をつくって、誰がどういうふうに分担するか、

その成果をどうやって分配するか、ということが、人間社会のありかたを根本的に規定する、ということになります。この配分をするときに、性別を重視する、というのが、人類社会で非常に広範に見られるやり方でした。

というより、もっと根源的なことがここにはあると思うのです。人間を区分けして、どこかの集団に割り振り、その集団に相応しい発想や振る舞いを獲得するように仕向ける、その根源が男女の区分けなのではないでしょうか。

そこで子どもが生まれると、大人が

寄つてたかつて性器の形状を確認し、

「この子は男」「この子は女」と振り分けます。すると、その振り分けにしたがってその子への大人の対応が変わり、子どもは男らしく、あるいは女らしく振る舞うように訓練されます。少し大きくなると、男の子集団、女の子集団に分割され、それぞれに相応しい作法や言葉遣いを身体化します。こうして「男の子」「女の子」が成立します。

大人になると両者の区分けはもっと厳しくなっていきます。それぞれに着る服がまったく違い、言葉遣いや関心の対象や、挙句の果てに社会的役割が

変わってきます。そしてそれを「変だ」と思うことは変だ、と思い込んでいくのです。こうして男女の区分けが確立し、再生産されます。

そして、この過程で人間は、自分の帰属するカテゴリーが何であるかを感じ、それに相応しい振る舞いを獲得する、という能力を身につけるのです。これこそが、最も重要なことである、と私は思います。そうすることで、クラブや地域社会や会社やお寺やなんかんやの場において、自分の役割を感じ、それに相応しい振る舞いを自動的にするようになり、そうすると「立派な大人」と見做されます。逆に、これができないと「子ども」だと思われるのです。

固定的役割分担と 社会の変化

さて、問題は、こういったタイプの社会の管理そのものが、現代日本では機能しなくなっている、ということです。というのも、これは社会における必要な役割というものが変化せず、限られた種類の役割を誰かが果たしていれば、社会がもつ、というような固定的状況を前提にしているからです。

社会が急激に変化し、やらないといけない仕事がどんどん変わっていくときに、このような固定的役割分担システムを使っていると、状況にまったく対応できなくなります。私は、日本社会の具合が悪くなっていることの根本原因のひとつは、ここにあると思うのです。

近年の大きな変化の要因は、三つあると言えるでしょう。それはだれでも知っていることですが、コンピューター化、アジアの台頭、高齢化です。かつての日本のウリは、勤勉で忠誠心の高い男性労働者集団と、彼らを支える主婦軍団でした。その竹槍精神による生産活動は、どの国も真似ができないくらい、凄く効率を発揮しました。

しかし、機械がコンピューター化によって自動制御されるようになり、工場ばかりかオフィスやマーケティングまでオートメーション化されると、こんな集団は不要になりました。また、アジア各国の巨大な低賃金若年労働者集団の出現により、勤勉で優秀な労働力は、有り余るほどになったのです。その上、日本では高齢化が進行し、その労働者集団が消滅しつつあります。つまり、日本の繁栄を支えた条件の全てが消滅してしまったのです。

こうなると、世の中の変化の最先端に立って新しい事業に挑戦し、創造的に事態を解決しつづける、というタイプの仕事以外、日本でやることはなくなってしまうのです。にもかかわらず、社会構造はそのままになっています。それゆえ、こういう仕事は一切やらないばかりか、それに挑戦する人々の脚を引っ張り、もはややらずともいい仕事、むしろやらないほうがいい仕事ばかりに人々は熱中しています。それではまったく儲かりませんので、それは財政支出によって支えられています。その上、高齢化したかつてのモータリ・サラリーマンは「あんなに働いたんだから約束通りに年金よこせ！」と圧力をかけます。こうして税収は一向に増えないばかりか減少傾向にあるのに、財政支出ばかりが増えて、国債が毎年百兆円増えるようなことになっています。

思い込みを排除すること

いま私たちがやらないといけないことは、一生懸命に目の前の仕事を片付けることではありません。そんなことをしたって、骨折り損のくたびれもう



●やすとみ あゆむ

1963年生まれ。現在、東京大学東洋文化研究所教授。京都大学経済学部卒業後、銀行勤務。京都大学大学院経済学研究科修士課程修了。京都大学人文科学研究所助手、名古屋大学情報文化学部・東京大学大学院総合文化研究科・情報学環助教授を歴任。

著書に、『ありのままの私』（ぴあ社）、『満洲暴走 隠された構造 大豆・満鉄・総力戦』（角川新書）、『生きる技法』（青灯社）、『複雑さを生きる』（岩波書店）、『満洲国』の金融』（日経・経済図書文化賞／創文社）、『誰が星の王子様を殺したのか—モラル・ハラスメントの罠』（明石書店）、『生きるための経済学—〈選択の自由からの脱却〉』（NHKブックス）など多数。

共著に、『親鸞ルネサンス—他力による自立』（明石書店）、『今を生きる親鸞』（樹心社）、『ハラスメントは連鎖する—「しつけ」「教育」という呪縛』（光文社新書）など。

けに過ぎないのです。儲けが出ているように見えても、煎じ詰めれば財政赤字でばら撒いたお金による幻想にすぎないのです。

我々がやらねばならないことは、いま行っている活動に意味があるのかどうかを感じ取り、意味が無い、と感じるなら勇気をもって即座にやめることです。そして、意味のある仕事は何かを探し求め、実行することです。

このような仕事をする上で、最も大切なことは、思い込みを排除することです。思い込んでいると、目の前に転がっているものが、見えなくなるからです。この効果は実に強烈です。

たとえば、ピーター・ドラッカーという偉大な経営学者が書いていることですが、コンピューターの産業化について議論してきた人々は、消費者がコンピューターを使って商品を注文したら、それをどうやってたらコンピューターから取り出すことができるか、をずっと考えていた、というのです。現に、電子書籍や音楽データなどは、そうやって配信されているので、確かに一理あるのです。

しかしそれよりも世界に大きな影響を与えたのは、コンピューターを使って注文したら、宅配便で商品が届く、

というシステムの開発でした。コロナブスの卵のようなもので、今となっては当たり前なのですが、長い間、誰もそんなことを思いつきもしなかったのです。

あるいは、ドラッカーは二十世紀最大のイノベーションのひとつは、月賦販売だ、といいます。それ以前には、モノを売ったらお金を貰う、というのは当たり前のもので、お金がなければどこから借りて払え、というのが常識だったのです。月賦販売は、その当たり前を覆しました。モノを売ってもお金をもらわず、毎月少しずつ払ってもらおう、というやり方が登場したことで、高度消費社会が可能になったのです。ちなみに、世界で最初に月賦で家売を売るといふ商売を大々的に行ったのは、阪急の創始者である小林一三いちぞうだと言われています。

イノベーションを起こす

さて、人々が、自分の役割を、性別や年齢や出身や学歴によって固定されたものだ、と思い込んでいる社会を想像してください。こういった人々が「果たしてこの役割には意味があるのか？」

「意味のあることとは何か？」という問いを発することがあるでしょうか。自分は性別が男／女で、年齢が何歳で、親の職業が何々で、学歴が○●卒であるから、この役割を果たすのは当然だ、と考えている人は、決してそんなことを考えません。目の前の役割を果たすことで、自分の立場を守ることに必死であり、余計なことを考えている余裕などないからです。

これでイノベーションを起こすことは決してできません。そういう人は、現代の日本社会では機能しないはずなのです。

ところが、恐ろしいことに今の日本社会は、この機能しないはずの仕事をしている人にお金の流れこむようになっているのです。そういう仕事を守るために、さまざまな規制や決まり事があるために、そこには、そこに発生する既得権益が維持されるように、巨額の財政資金が付き込まれています。かくして、急激に社会は機能不全に陥り、その隠蔽のために国債が急膨張しているわけです。

もちろん、さすがにこんなことはいつまでも続かないと国民が考えたので、自民党政権が一度崩壊し、民主党政権が成立したのですが、そうなる

当然ながら、このシステムは作動しなくなりしました。しかし、国民の多くが、そのことに耐えられませんでした。今までのように目の前の役割を果たすことに全力を挙げても、ちっともお金が流れてこない状態に恐怖したので、あわてて自民党政権に戻し、今まで以上の異次元の資金投入を行わせるべく、アベノミクスを支持したのです。

しかし、そもそもいつまでも続かないはずのことを、より大規模にやるなら、ニッチモサッチモいかなくなる日が、より早くやってくる以外のことは起きないのです。私はこれはとても困ったこと、それどころか、とても恐ろしいことだと思っています。

一步を踏み出す

今こそ私たちは、思い込みを打破して、日常の隅々に至るまで、「本当にこれは意味があるのか」という問いを發さないといけないのです。そのためには、無意味な人間の区分けというもの、を、排除せねばなりません。特に、男女の差別はもつとも根源的なものがあり、これは徹底的に排除する必要があります。そうすることで我々は、

さまざまの無意味な区分けから自由になるための第一歩を踏み出すことができるのです。

この一步を踏み出すための勇気を、私たちはどこからもらったらいいのでしょうか。私の一つの回答は、念仏です。

「竊以難思弘誓度難度海大船」

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船

〔『教行信証』真宗聖典二四九頁〕

親鸞の教えの通りに阿弥陀如来の本願を信じるなら、安心して大船に乗託し、この思い込みを打破して創造性の海を渡っていくことも、十分に可能なのではないでしょうか。



『生きる技法』

安雷歩 著
青灯社 定価：1,500円+税

「助けてください、と言えたとき、あなたは自立している」【命題1-5】
一見、助けを求めることと自立することは、相反すると思いませんか？
そこには、いわゆる常識を覆す“安雷流 生きる技法”があります。

著者は生きることに苦しみ、いつも死を考えていたと言います。かつての配偶者との結婚生活や両親との関係を断つに至ったことなど淡々と記し、「自立」「友だち」「愛」「貨幣」「自由」「夢の実現」「自己嫌悪」「成長」の8項目に分け15の命題を立てていきます。

そしてまた、生きる技法を学び始めたばかりという著者は、自分の考えが果たして通用するのか、読者自身、独自で考えてほしいと投げかけます。

男女両性で形づくる教団を めざす協議会

2015年3月13日開催

二〇一五年三月十三日、宗務所を会場に「男女両性で形づくる教団をめざす協議会」を開催しました。出席者はこれまで女性室公開講座を実施した教区、また未実施教区の代表者計二十七名。それぞれ自教区にあつては、何らかの形で性差別の問題に関わつておられる方々です。女性室公開講座は二〇一四年度までに二十四教区で実施されていますが、講座開催を契機としたその後の取り組みも教区によってさまざまです。具体的な情報の交換が何より求められています。

会議では、まず初めに、元女性室スタッフの見義悦子さんから「同朋会運動の中の女性たち」と題し提言がありました。女性室発足以前より教団の性差別の問題に関わり続けてこられた見義さんは、古い宗門体質を克服すべく声を上げ始めた女性たちのめざめが、女性住職の誕生や女性室の設置につながつていったという経緯を話されました。また、性差別問題がすべての教区において共有課題化されていない現状にも触れ、その要因として初期同朋会

運動の根幹でもある「家の宗教から個人の自覚の宗教へ」ということが、一人ひとりで自分自身への言葉として受けとめ得なかったのではないかと、また、私たちの宗門が内包する性差別の問題がそれぞれのの中で「問い」となってこなかったからではないかと指摘されました。

続けて二〇一三年度に女性室公開講座を開催した三重教区からの報告がありました。当日の講座では「あたりまえがあたりまえなのかな？」と私にとつてのジェンダー問題」のテーマのもと、スタッフ自らが台本を作り演じた寸劇の映像を紹介しながら、講座開催に至るまでの経緯やそこから見えてきた課題などについて発表されました。

会議の後半は三班に分かれて座談会を行い、それぞれの教区が抱える課題や公開講座を開催するにあたっての課題などについて活発な意見交換がなされました。そして班別座談を踏まえた全体協議会では、公開講座終了後も継続して積極的な取り組みをしている教区の活動紹介などがある一方で、性差別問題への関心の低さなど、教区の



見義悦子さんによる提言

実状から公開講座を立ち上げる際の難しさなどについて、率直な意見が出されました。

協議会で出された意見は、いずれも各教区の現状を如実にあらわしています。女性室としてあらためて、「男女平等参画」の願いを発信していく必要性を感じました。

それぞれの現場で、性差別問題への意識を高め、課題を教区と共有し活動を展開していくためにはどのような方法があるのか、女性室としてともに考えていきたいと思っています。

一人に立つ

現代を生きる女たち

産む・産まない・産めない

女性会議では二カ年にわたって「一人に立つ」をテーマに学んできました。今回は「現代」に焦点をあて、テーマを「一人に立つ」現代を生きる女たち」とし、大橋由香子さんを講師に迎えました。

大橋さんからは、母性、フェミニズム、優生思想の問題など多岐にわたる課題をいただきました。

私が社会人になった一九八二年頃、「優生保護法」の中絶許可条件から経済的理由を削除することが国会で議論になりました。以来、私は出版関係の仕事が続けながら、「優生保護法」に関する女性グループに関わってきました。結婚（同棲）し、子どもを授かった頃には育児休業がなかったので産休をとり、その後、職場復帰しました。子どもを育てるのは大変だけれどおもしろいと感じて、二人目を出産しましたが、正社員として続けるのは厳しく、それからはフリーランスで働いていま

す。そんな経験もあり、「産む・産まない・産めない」と「働く・働かない・働けない」ということは女性が迷ったり悩んだりする大きなテーマだと実感しています。

出産をめぐる女性がどのように苦悩してきたのか。今は産むか産まないかを選べますが、そうではない時代があり、今でも選べない国や地域もある。産むか産まないかの選択は意外と普通のことではないんです。

一八六九（明治二）年に「墮胎禁止令」が出て、一九〇七年に現行「刑法」の墮胎罪ができました。それが今もずっと続いていて、墮胎（人工妊娠中

おおはしゆかこ●1959年東京生まれ。出版社勤務を経て、フリーライター・編集者。母子保健研修センター助産師学校・埼玉女子短期大学・フェリス女学院大学で非常勤講師をつとめる。

著書に『満心愛の人 益富鶯子と古謝トヨ子—フィリピン引き揚げ孤児と育ての親』『記憶のキャッチボール—子育て・介助・仕事をめぐって』（インパクト出版会）、『生命科学者 中村桂子』『同時通訳者 鳥飼玖美子』（理論社）、『ニンブ・サンブ・ハハハの日々』（社会評論社）。編著に『福島原発事故と女たち—出会いをつなぐ』（梨の木舎）、『キャリア出産という選択』（双葉社）、『働く／働かない／フェミニズム』（青弓社）ほか。

また、女性室広報誌『あいあう』第25号に「これ以上、つめこまないで—震災・原発事故と「母性」という押し入れ」を寄稿いただいている。



講師 大橋由香子さん

絶)をした女性や施術者は処罰されませんが、相手の男性は全くお咎めなしです。そういう意味で墮胎罪は女性差別だと、国連の「女性差別撤廃委員会」から勧告を受けていますが、日本政府は問題ないと回答しています。私たちが妊娠や中絶をどう考えるかは宗教観や生命観によって人それぞれ違って当然ですが、国が中絶を罪として罰していいのかは疑問です。

産児調節運動

加藤シヅエさん(一八九七年〜二〇〇一年)は戦前、アメリカに留学した時、産児調節運動(コンドーム、避妊ゼリーなどでお産を調節すること)を知り、避妊をして性生活を調節することが女性解放の鍵だと思い、帰国後、普及につとめました。しかし、当時の日本は富国強兵のために「産めよ殖(ふ)せよ」政策が取られていたので、危険思想とみなされ何度も逮捕されました。

避妊も禁じられ、妊娠したら産むしかない時代が明治から昭和初期までありました。望まない妊娠をして自殺した人もいました。体がバラバラになれば妊娠がわからないですむことから、

鉄道自殺が多かったそうです。

柴原浦子(しばはらうしこ)というお産婆さんは女子教育の必要性や酒や博打(ばくち)の背後にある弊害を説いて回りました。弊害というのは今で言うDV、つまり夫の暴力です。彼女は産児調節運動に参加し、経済的に苦しい女性の中絶をし「施術者」として墮胎罪で実刑判決を受けました。

優生思想

加藤シヅエさんは戦後、国会議員になり彼女も中心となって作られたのが一九四八年の「優生保護法」です。この法律では刑法墮胎罪で禁止されている中絶を、例外的に許可しています。目的の一つは「母性の生命保護」で経済的な理由も含まれます。もう一つは「不良な子孫の出生を防止する」という優生的な理由で、ハンセン病療養所入所者の人たちや障がいのある人に対する中絶や不妊手術が許可されていました。50年以上たって、「優生保護法」はハンセン病の人たちや、障がい者の人権を無視し差別だと主張する活動の積み重ねで、一九九六年にやっと「不良な子孫の出生を防止する」に係る条項が削除され「母体保護法」になりました。今は経済的理由と強姦を理

由にした中絶が許可されています。しかし、墮胎罪は百年以上、存在し続けています。

妊娠すると「母子手帳」が配布されますが、この起源となった妊産婦手帳はナチスドイツの「家族手帳」からアイデアをもらいました。戦時中の食糧不足による配給では、手帳を持っていくと妊婦には多めに配給されました。女性たちは国のために「銃後」を守る子宝部隊とされ、10人以上の健康な子を産んだ家庭は表彰された時代にできたものです。

戦争中の産めよ殖(ふ)せよという時代でも、「役に立たない」とされた病氣や障がいのある人は「穀潰し」とされました。戦争中にできた国民優生法をさらに強化したのが戦後の優生保護法で、「不良な子孫の出生を防止する」として、本人の同意なしに優生手術(永久避妊手術)された人が1万6500人、その7割が女性です。

ところで、「一人に立つ」と関連しますが、障がいのある人が自立するとはどういうことなのか。私が若い時に考えていた自立は経済的に自分で稼(かせ)ぎ、身の周りのことも自分でするということでした。けれども障がいのある人がヘルパーさんに車椅子を押しても

らってスーパーに行き、自分の意思で買い物をするような生活を障がい者解放運動では「自立生活」というのだと知り、人の助けを借りることに自立は矛盾しないのかも、と発見しました。「産む・産まない・産めない」ことに加えて、「働く・働かない・働けない」、つまり経済的な自立と家事・育児・介護とをどう折り合いをつけるか、古く新しい問題です。金子文子(かねこふみこ)さんや山代巴(やましろともえ)さんの書いたものを読むと、セクハラ、DV、虐待のなかで、経済的に自立する困難が書かれています。ぜひ読んでみてください。

「母性」の名の下に

障がいのある人はもちろん、女性が経済的に自立することは容易なことではありません。今でも女性社員の賃金は男性の約7割です。非正規も加えればもっと差があります。日本だけでなく、世界でも男性中心です。個々の男性が悪いということではなく(悪い男もいますが)、仕組みがそのようなになっているのです。

女性に期待される役割とは、自分を犠牲にして他者(特に夫と子ども)を生かす、それが「母性」という形で現



れています。母は子どものために自分を犠牲にすることを厭わ^{いと}ないし喜びでもある。でも「母性」の名の下に様々なことを諦め、犠牲にし過ぎることは、本人にも家族にも本当にいいことでしょうか。「あんたのために私が我慢した」という恨みがどこかに滲^{にじ}んでこないでしょうか。

一方、母性的なことの逆、つまり母親失格と言われるのが中絶です。命になる萌芽、身近な他者がお腹の中に入るけれど、今は一緒に生きられないというジレンマの中で、もがきながら中絶をすることがあります。子宮をもっている女性は苦悩せざるを得ない。「中絶＝悪」と簡単に言えるのか。女性にとって妊娠、自立、「一人」ということは複雑で難しい問題です。

家事育児と無償労働

「性別役割分業」が非常に強いことは、日々の生活で感じられます。夫が稼ぎ妻が家事育児をする、そういう役割分担を個人的に選択するのは自由です。ただ、それが正しい家族であると国に言われるのは疑問です。

家事労働はお金の支払われない無償労働です。社会ではお金を稼ぐ方が偉いとされています。夫婦ゲンカをして男性が「誰に食べさせてもらっているんだ」と決め台詞のように言います。そこでシユンとするのではなく、「じゃ、自分でご飯を作っているの?」と妻は言い返すべきだと思います。

とはいえ、今の資本主義社会では、

外でお金をもらえる仕事をしているほうが威張^{かば}っていて格差がある。しかも、女性が賃金をもらう仕事をしても、帰宅するとセカンドシフトで次の労働が待っている。それが家事育児です。共働きしないと生活が成り立たなくなっています。シングルの人が増えています。「夫が稼ぎ、妻は家事育児、子どもがいる家庭」が正しくて標準だと優遇する社会システムは変わってほしいと思います。

出生前診断と選別の中絶

悲しいけれど、様々な事情で中絶が必要になる場合があります。そのことで罪の意識を感じざるを得ない人もいますが、それは個人の気持ちであり、国が処罰したり共同体が追いつめたりしないでほしいと思います。

出生前診断は「選別の中絶」と言われますが、私は「選別の中絶」と呼んでいます。この検査で選択の幅が広がる、妊婦さんの安心のためと宣伝されますが、根本的に疑問を感じます。

科学技術の進歩は止められませんが、このような技術がなぜ出てきたのか、出生前診断をどう考えたらいのか、私も友人と一緒に本当に悩んでいる

ます。そして選別の中絶が良いか悪いかの議論になったら、非難され追い込まれるのは往々にして個々の女性なのです。

やむを得ず中絶をした人には心のケアが必要ですし、そもそも情報も不十分です。お腹の中の胎児の状態が血液検査だけでわかると報道されますが、ごく一部の病気や障がいについて、しかもパーセンテージ、確率しかわかりません。「異常」のある確率が高いと言われた時に、あなたならどうするか、受診する前に2人でちゃんと考えておく、そのための多様な情報(障がいのある子の子育てについても)が必要

自分で考え、悩んで決める

個人的なことは社会的なこととながっています。最近では自己責任ということが言われ、自分一人で背負い込んで「助けて」と言いづらい世の中になっている気がします。一人ではなく、互いに協力し合う自立、そして自立の自身をふくらませていき、「自分で考え、悩んで決める」というプロセスが、いろんな場面で大事だと思います。

(講義抄録／編集・女性室)

私の「役割」ってなんだろう？ 一日々、生きづらさを感じていませんか？

私たちは、自分の人生を生きていく上で
様々な場面に応じた役割を担っています。

「役割」を果たす上で、日常生活が我慢と忍耐で
「生きづらく」感じ、「何だか違うなあ」と思いながらも、
頑張りすぎていないでしょうか。

ほとんどの人は何役もの顔を持ち、
自分自身を犠牲にしてまでも

環境にマッチした生き方をしようとしています。

その「役割」はあなたが自分で選んだものですか？

すでに与えられていたものですか？

あなた自身が、世間の「らしく」ということで、

自分や相手をガンジガラメにしていますか？

一緒に「役割」・「生きづらさ」について考えてみましょう。



やすとみ あゆみ
講師 安富 歩さん
(東京大学東洋文化研究所教授)

会社に勤めていた時は、幾度となく
「女性だから」という無言の圧力や男
性社員との待遇の違いがありました。
退職後も、多少の問題があったとして
も、「あの頃に比べたら」という思い
もあり、問題意識がなくなっていまし

Report

岡崎教区第二十六組 如意寺
阿部道子 (実行委員)

引き続き、歌の趣旨でもある「立場主義」ということから、親鸞の他力の思想に出遇ったこと等を話されました。講演と質疑応答の間には、休憩をかねた「あいさつin岡崎(カフェタイム)」をもうけ交流しました。

講演の冒頭、安富さんは、ピアノ伴奏(伴奏・天白真央さん〈岡崎教区六ツ美組淨妙寺〉)により、自作の『サリエリの歌(または立場の音楽)』を披露されました。

二〇一五年六月二十五日、岡崎教区会館(岡崎教務所)二階大ホールを会場に、安富歩さんを講師に迎え、「私の「役割」ってなんだろう? ―日々、生きづらさを感じていませんか?―」をテーマに女性室公開講座(岡崎会場)を開催しました。

た。そうした中で、今回、実行委員をさせていただきました。

安富さんは、現代社会は「男女」をあまりにも分け過ぎて、性の小分けをすること、〃〃〃らしくする〃〃〃装置となっていると指摘されました。役割や立場には、社会が作ったイメージや価値観が根底にあり、〃〃〃らしく〃〃〃の先の暴走の恐さがある。役割があると安心してしまいう自分もいますが、自分がしていることに意味があるのかを考えたことが大事だと気づかせていただきました。

私たちは、男女の性別のみで、社会的な役割を押しつけられています。しかし、一人ひとりが生き方(仕事・生活・考え方)を変えることによって、その押し付けを変えていくことができるのではない。立場を守るために頑張るのではなく、価値観を当たり前と思わず、豊かな心で判断する。そう努めることができたなら、生きやすい世の中になり、自分自身もいきいきと生きていくのではないかと感じました。

ただ、一方で、自分自身の判断が自分にとって都合のいい判断になってしまう危うさも感じています。

Report

岡崎教区 第八組 順覺寺

やまだ ちえい
山田智永 (実行委員)

あいあうin岡崎 (カフェタイム) で和やかに交流

女性室公開講座を岡崎教区で開くにあたり、十四名の実行委員が具体的に検討に入ったのは二〇一四年九月であり、月一回のペースで懇談会を開催した。

テーマ・内容やスタイル・場所・講師・日程……等々。検討を要した一例として、テーマ・サブテーマ決定までのキーワードを列举すると、「男」「女」「夫

「妻」「住職」「坊主」「父」「母」「男らしい」「女らしい」「役割」「生きづらさ」など。しかし、寺院の抱える課題・役割・悩みに限定すると、一般参加の方々には分かりづらくなる心配もある。この講座は、ジェンダーの抱える課題や文化をいかにして克服していけるのかを発信していく役割がある。

今回、安富歩さんは「人間が型にはめられて使われる状態、それらを『魂の植民地化』と呼び、その状況からどう抜け出すのが現在のテーマである」と語った。人間は様々な可能性や

特徴を持っているにもかかわらず、それらを無視し、「社会的役割」を生物学的性差だけによって分類しようとするのが問題だと指摘された。

国では一九九九年に「男女共同参画社会基本法」が公布・施行され、男女参画社会を作っていくための基本理念を掲げ、国民が果たさなくてはならない役割を定めている。しかし、そのことを私たち一人ひとりがどう再認識していくかが問われていると思う。

Report

岡崎教区 第三十四組 西敬寺

なかやま えつこ
中山恵津子 (実行委員)

お話の冒頭で行われたミニライブでは、自作の『サリエリの歌(または立場の音楽)』を披露され、大変驚かされました。「この国は立場でできている」という歌いだしで、安富さんは大きな声で、魂を強く叩きつけるような歌い方をされました。テレビで拝見した時はとても静かにお話をされていた印象があったので、なおさらでした。

「私の『役割』って何だろう?—日々、生きづらさを感じていませんか?—」という今回のテーマでしたが、私自身はこれまでそのことを深く考えたり、感じたことはありませんでした。大変な困難にぶつかっても、「これが自分の人生だ」と思い、前向きに対処してきたつもりです。「男は男らしく、女は女らしく」と、戦後教育を受けた者にとっては、親の教えを一番に守ってききましたので、そん



『サリエリの歌(または立場の音楽)』を披露

なに深く悩んだりしませんでした。ある程度自分の考えも通してもらい、好きなように歩んできた人生だったと思います。ですので、今回の安富さんのお話は、自らの生き方や与えられる「役割」について、新たな視点をいただいたように感じています。

安富さんがお話された「立場主義」に関連した質疑応答では、憲法改正や原発問題などの多岐にわたる議論が交わされていました。私が暮らす静岡の浜岡原発も再稼働の動きがあります。私自身も含め、子や孫がこの先どのような人生を歩いていくが見えない恐怖と不安を感じています。けれども、先が見えない中にも真宗の教えが私たちの道しるべになり、希望になるのではないかと感じています。

今のままで何が悪い —あたりまえを問う—

男は男らしく、女は女らしく、夫らしく、妻らしく、
子どもらしく、親らしく、住職らしく、坊主らしく、僧侶らしく…。
「らしく」って一体なんだろう？

これまで、いろいろな学習会には参加してきたけれど、
あまりピンとこない。「今のままで何が悪い」 ndero? 何が問題なのだろう？
私たちは自分の気づかないところで、自分にも他者にも「らしく」を強要し、
お互いを縛り合い、そのことに痛みもありません。

問題は一人だけが悪いという性質のものではなく、
また押し付けるものでもありません。
住職、坊主、門徒、男、女、大人、子どもが
それぞれの立場において、
私たちの「らしく」から見える問題を共有し、
この公開講座が一人ひとりの
スタートラインになることを
念じています。



そのだひさこ
講師 園田久子さん
(福岡県人権研究所理事・
九州大谷短期大学非常勤講師等)

二〇一五年五月三十一日、東本願寺熊本会館(熊本教務所)にて、女性室公開講座(熊本会場)を開催しました。

「今のままで何が悪い—あたりまえを問う—」というテーマのもと、園田久子さんを講師にお迎えしてお話いただきました。

また、講義をうけて参加者全員で別に分かれ、疑問や感想を付箋に書いて大きな模造紙に貼り付けていくワークショップを行い、講義の中でそれぞれの印象に残った言葉や、生活を通しての感想などが話し合われました。

各班の発表後、園田さんからまとめの講義をいただきました。

Report

熊本教区 第三組 光樂寺
おおつやますなこ
大津山壽奈子(教区解放運動
推進協議会長)

二〇一三年から公開講座を開くための協議がはじまったものの、テーマを見出すまでかなりの時間を要しました。委員各々が意見を十分に出しつづけための時間でもあったように思います。

しかし、その話し合いの中で、アンケートで性別を書く項目は「男」「女」だけでは押さえることができない、と



こういう“場”だからこそ、話せることも

いうことにも気づかされた大切な時間でもありました。そこでアンケートの性別は自由に書いてもらうことにしました。

講義の中で園田さんが「自分が獲得したものに座り込んでしまうと、自分にとってのあたりまえとなる」とおっしゃったのがとても気になりました。門徒さんや地域の人たちから「坊守さん」と呼ばれている私。お寺の後継者と結婚した時から、その立場になることはわかっていました。ですが、居心地がいい立場ばかりではありませんでした。「お寺は坊守さん次第だ」という言葉も聞きます。そのプレッ

シャーを感じながら、一方では、坊守という役割に座り込んでいる私がいました。家族からは、「鏡を見たら」と厳しい指摘が入るほど、私は自己中心的な考えをしているようです。自分の姿は自分の目では見ることはできません。あらためて、仏法を聞き続けることを大切にしたいと思いました。

Report

熊本教区 第五組 法燈寺

熊本教区 第五組 法燈寺
たなべいこ
田邊敬子
(教区解放運動
推進協議会委員)

「お念仏の産着にくるんで……」。と

ある結婚式の御仲人のご挨拶。身重の新婦の前に、多くの方々、そして私が瞬時に思ったこと。「元氣な男の子を」と。今まで研修会で学んできたはずの坊守である私が、と恥じた。

園田久子さんの「今のままで何が悪い——あたりまえを問う」の講演では、らしさについて話された。私たちが生まれ育つ中で、いつのまにか、あたりまえやらしさを植えつけられていったように思える。前述の跡取りは男の子、と無意識に思い描いたようにである。らしさは気づかないけれど、意識せず絶対化する。自己絶対化されると、排除される人が出て分断される。らしさは歴史の垢、絶対化の垢だとい

う。どうやったら剥ぎ取れるのか。人は剥いでくれない。研修会は、垢を取り合う場所でしょうと。

私が「恥だ」と感じたことに、座り込んでしまっただけではない。それをあたりまえだと感じない、そういう違和感を大事にしたい。その感性を摩滅させないように、「今のままで何が悪い」に疑問符を付けていきたい。

Report

熊本教区 第三組 浄玄寺

よしおてんせい
吉尾天声
(教区解放運動
推進協議会委員)

女性室公開講座(熊本会場)のスタッフとなり、企画から講座まで参加をさせていただいた。離婚を経験し、再婚したばかりの私にとって、その時間は一人で家事等を行ってきた私が、再婚したとたんに自分の中からむくむくと頭をもたげてくる社会的性差にまつわる感覚があることに気づかされる時間となった。

妻とは寺や家庭での役割についてよく議論をする。私が当たり前と思っていることに妻は「なぜ？」とよく問いかけてくる。その「なぜ？」との問いかけは、ワークショップの中でも噴出した。自分の価値観は当たり前前のことで、



各自の思いを付箋に託して

何も意識にのぼらない。自分は大丈夫で幸せで、妻は理解をしてくれていると思っている。いや、そう勘違いをしている。だから、問われると「え？」と思う。その「え？」が今の自分の感覚に留まることを阻害してくる。

出会った人と人が「なぜ？」と素直に言い合える関係。そこには二人が自然に向き合う場が生まれ、自分との出遇い、目の前の一人との出遇いがおとずれる。

このごく当たり前のことだけれど、忘れていた関係を思い起こさせられた講座となった。

男性の仕事 女性の役割

仙台教区気仙組正徳寺

ちばながこ
千葉寿子



昔から、男たるものゝとか、女らしくゝとよく言われているものである。「男子厨房に入らず」などは、先輩方でも実践なさっている方も多いだろう。私の年代になると、男性は外で働き女性は家事をしているというスタイルから、ほとんどが夫婦ともに仕事を持つようになっていく。私が社会人になったばかりの頃は、ちょうど男女雇用機会均等法が施行されて何年かというところだったので、職場の中にも、男女平等にという雰囲気が出つつあるのを未熟な身ながら感じていた。

ある日のこと、女性の先輩が会議の中でお願いがあると手を挙げた。その内容は、お茶汲み^{ちやき}を当たり前のようにならに頼むのはいかがなものか？ということだった。みんな同じように仕事をしているのに、手が空いているときならいいが、仕事をしている私の手をわざわざ止めさせて、お茶を出してほしいというのはおかしくないのか？そ

れぞれ用事があってお話をする方が出せばいいのではないですか？という問いかけだった。

結局その時は、手を止めさせているつもりではなかったけれども、そのようなことであれば、それぞれで対応するということになった。次の日から男女関係なく、自分の来客にはそれぞれでお茶汲みをするようになったのだが、私は何か腑に落ちない居心地の悪さを感じていた。

私が考えたのは、自分が女性の役割だからと思ってお茶汲みをやっていたのか？ということだった。その人に用事があつて来ているのだから、当人ではなく周りの気がついた人がお茶を出すもの。先輩にさせないようにならなくてはと思つて率先してやっていただけだ。

そんな出来事から程なく、ある行事の片付けの最中に雨が降ってきた。重い物を運ぶ力仕事ばかりが残っていた

せいか、雨の中作業しているのは、私以外は男性のみで他の女性は一人もいなかった。その様子を見て、ますます納得がいかなかった。お茶汲みは女性だけの仕事じゃないと言うなら、力仕事も男性だけの仕事じゃないのでは？そもそも「仕事」と「役割」の違いはどこにあるのだろうか。

二十年近く経った今でもこの時のことは腑に落ちないままだ。男性の仕事、女性の役割を思うとき、この時のことを思い出す。男女共同参画社会という言葉もあるが、それは一人ひとりの特性を真に理解した上で成り立つことだろう。そして互いに自立した関係であること。お互いを活かすために理解し合い、助け合う。それは、男女や夫婦の関係だけでなく、これからの住職と坊守の在り方、寺院とご門徒とのつながりにも通じる、人としての関わりへの問いかけだと思ふのだ。

「家」と「覚悟」

高田教区第4組養性寺

うちやままさあき

内山真明



「お寺が一番上が継ぐものだ」「立派なお寺さんになりなさい」。しつこい、面倒くさい！

血筋に縛られた人間が寺の姉妹兄弟の一番上によく口にする言葉です。小さい頃は「うん」と元氣よく答えていた僕も、小学校高学年の頃にはそれが嫌になっていました。現に小学校の文集には「普通に過ぐす」といった内容の文章を書いた覚えがあります。

「お寺の長男だから」ということで継いでいくように言い続けていたのは、約十五年前に亡くなった祖母とまわりのご門徒さんでした。そんな中、父と母は私に「真明の人生だから真明が選びなさい、選びの中にお寺があつたら継いでくれればそれでいい」と、ずっと「選び」の大切さと「覚悟」を伝えてくれました。ただ僕がそこに気づいたのは二十歳の時でした。小学校の時に「普通に過ぐす」とは書いたものの、それ以降特に何も考えずにボーッと流れに任せ、中学、高校を経て同朋大学に入りました。大学三年の時です。父から推進員養

成講座で「本山に行くから来ないか」と誘われ、ちよつと行つてみようと思つたのがきっかけでした。その時の講師が「相続とは何を相続するのか、相続していくのか」という話をしていました。「念仏相続」のお話です。僕は自分の二十歳まで歩んだ過去の歩み、今の自分、これからの自分をじっくりと考えるきっかけをその講師からいただきました。自分の「已、今、当」。その中で僕に何が伝わっていて、何を伝えて行けるのか。自分が育つた環境、見てきた父や母の背中から、どんなことが表現してみたいのか。表現できることは一体なんなのか、それができる場がどこなのか。

それは自分の足元にありました。この「お寺」という場所があるじゃないかと、その年に養性寺に入ることを自分で決め、今に至ります。

帰つてきてからもいろいろな悩みがありました。僕が自分の選びでこの場に身を置いているのに、他人から「お父さんとお母さん、お寺を継がせるよ

うに上手くやったね」と言われることへの気持ち悪さ。「早く結婚して養性寺の担い手をつくつてくれや」という独り身に対して理解なくデリカシーのない大人。「よく帰つてきた」「期待してるよ」。まわりの願いもよくわかります。

今日、老若男女問わず、社会の中で自由な発言ができる環境が増えつつあります。そこでは多くの選びがあり、無限の可能性があることを皆知っているはず。そんな中で、長女、長男に対する「家」というモノへの縛りはゆるくはなりつつあるものの、未だ続いています。

自分の人生は一回しかありません。しかもこの生き方は誰もとつて変わることはできません。自らの選びを持つて生きている人に対して僕たちができるのは、ただ頷くことだけです。多くの人を持つている無限の選びと可能性、そしてそこに決断した覚悟を僕らはもつと尊重していかなければ、この「家」というシステムから出ることは、かなわないのかと感じます。

なぜ
メンズあいあう
なのか

女性室は、つながりを回復し男と女とがともに生きあうことを願って広報誌『あいあう』を発行しています。

私たちの教団では、長い歴史の中で創り出されてきた女性に対する差別に、近年ようやく光が当てられるようになってきました。

「人間を勵（いんげん）めるかの如き運動は、かえって多くの兄弟を墮落させた」という全国水平社創立宣言の言葉があります。

ここから教えられることは、性差別の問題に取り組むということは、男性がその正義感をもって女性を勵（いんげん）めり、男性社会に融和させていくことではない、ということです。女性をどう処遇するのではなく、男として生きる自らが問われていることに気づけと。

また、性差別を訴える女性たちの前に、私たちはただ加害者として頭（かしら）を垂れるのではなく、男性である私もまた性差別という仕組みの中に組み込まれた一人であり、「男らしさ」という束縛から解放されることがなければ、男と女とが「御同朋」として水平に出会うことはできないのではないのでしょうか。

性差別の問題は、女性の問題であると同時に男性の問題です。その視点に立って、男性の側からも積極的にこの問題を考え、肩の力を抜いて「男とは？」を語り合う場を開きたいという願いから『メンズあいあう』を刊行します。

編集後記

岡崎教区での公開講座で安富歩さんは、「立場主義」という問題を提起されました。

先の戦争は、与えられた自分の立場に固執し維持しようと頑張った結果、この国を破滅に導いてしまった。「立場主義」は、人間の本質的欠陥だと指摘されました。

現在の沖縄の基地問題、原発再稼働や安全保障関連法案の問題も、権力の側にある人は、自らの「立場」を「正義」として、どれだけ反対の声が起ころうともそれに耳を傾けることをしません。

我が身を振り返れば、「住職」や「坊主」、あるいは「夫」と「妻」などを自身の立場とし、立場で考え、立場で発言し、立場を演じることに躍起になっています。そして、本音を押し殺しても立場を優先することをよしとしています。立場が替われば態度を変えることもあります。

「立場主義」を克服していく方法は、私たちが生き方を変えることだと安富さんは言われます。ご自身、男装をやめることで社会がいかに女性に差別的かが見えた。反対運動だけではなかなか変わらないうが、1%の人が立ち止まり頑張ることをやめれば、一つの歯車が止まり、やがて全体のシステムが機能しなくなり社会は変わる。「立場主義」（自力）を棄て大いなるはたらきに委ねよというのが念仏の教えではないかと話されました。

教区の教化委員、実行委員の皆さんのご尽力により意義深い公開講座を開催できたことに感謝し、これを機縁にさらなる活動を共に進めていきたいと思っています。

（女性室スタッフ 本多祐徹）

女性室の動き

◆スタッフ派遣

2015年

- 4月13日 公開講座岡崎会場 事前スタッフ会
- 5月 7日 公開講座熊本会場 事前スタッフ会
- 5月 8日 山陽教区「男女共同参画推進実行委員会」に講師として参加
- 6月 5日 公開講座岡崎会場 事前スタッフ会
- 6月 9日 公開講座熊本会場 反省会
- 9月 4日 大聖寺教区「解放運動推進協議会との懇談会」に講師として参加
- 9月30日 山陽教区「男女共同参画推進委員会学習会」に講師として参加

◆公開講座

- | | |
|--|--|
| 2015年5月31日 熊本会場
会場：東本願寺熊本会館
講師：園田久子さん
テーマ：今のままで何が悪い
ーあたりまえを問うー | 2015年6月25日 岡崎会場
会場：岡崎教区会館
講師：安富 歩さん
テーマ：私の「役割」って何だろう？
ー日々、生きづらさを感じていませんか？ー |
|--|--|

◆第15回女性会議

- 期間：2015年4月20～21日 会場：真宗本廟研修道場
講師：大橋由香子さん（フリーライター・母子保健研修センター助産師学校非常勤講師）
テーマ：「一人に立つ ～現代を生きる女たち～」

◆男女両性で形づくる教団をめざす協議会

- 2015年10月2日 会場：しんらん交流館

表紙絵：上田 文

坂本慎太郎という人の『あなたもロボットになれる』という曲（アルバム『ナマで踊ろう』収録）では、ロボットになって不安や虚無から解放されることをどんどん支持していく社会が歌われています。その歌と安富歩さんの「立場主義」のお話が私のなかで結びつき、一人ひとりの役割が固定された姿をロボットで表しました。

目の前にある自分の役割を一生懸命はたしながら、その奥の不安や矛盾から巧妙に目をそらし続けていることが、私も含め、あちこちにあるのではないのでしょうか。脱・ロボット。

●お知らせ●

【第16回女性会議】

期間：2016年5月19～20日予定
会場：東本願寺 同朋会館

女性室広報誌『メンズあいあう』第9号

発行 2015年10月10日
発行人 木越 渉
発行所 真宗大谷派 解放運動推進本部女性室
〒600-8164
京都市下京区上柳町 199 しんらん交流館内
TEL 075-371-9247
FAX 075-371-9224